

学校経営のポイント

“秋葉原殺人事件”を拡大させない教育

若井 彌一

6月8日に発生した東京・秋葉原の殺人事件は、被害者の数が多かったこと、無差別殺人であったことによって、多くの人々に精神的不安を抱かせたが、この事件は、その後も予想以上の悪影響を及ぼしているようである。

次々と発生している「殺人」予告

この事件の犯人は、青森県のトップクラスの進学高校へ進学したものの、学業成績が不振であったこと、家庭的にも恵まれなかったこと、県外の短大卒業後も就職に恵まれない状態が続いていたこと、同年代の女性とのつきあいに恵まれなかったことなどが、本人の告白から明らかにされると、「甘ったれるんじゃない」という厳しい論調のマスコミ報道もみられたが、反対に、さまざまな精神的ストレスを感じている人々によると推認される、インターネット上に犯人に同情したり、共感したりする者が続出した。

好ましくない、否、困ったことであることは解説するまでもないが、この現象は事実として無視してはならないであろう。この種の事件が発生すると、「模倣犯」や「愉快犯」が出ることは知られているけれども、今回のように、次々と「殺人予告」者が出てくるのは異常である。

6月25日付けの『信濃毎日新聞』によれば、「携帯ゲーム機を使い、他人の無線LANにただ乗りして、インターネットの掲示板に『東京の開成中学で無差別刺殺する』と書き込んだ」として、長野県・松本市内の男子高校生（16歳）が書類送検されたという。

「殺人予告」等の書込み容疑で逮捕された人々のなかに、学校教育を受けている年齢の生徒や学生が

含まれていることに注目し、各学校（大学も含めて）では、「殺人予告」等の容疑で逮捕されたりする事態を招かないように、生徒や学生に指導を徹底することが必要である。

いわゆる「学校裏サイト」が、約38,000にも達していることが話題になったばかりであるが、そのようなサイトのなか（上）でも、「殺す」などの犯罪行為に該当する内容のものがあふれている。自分の名前は特定されないであろうと考えて、過激な書込みをしていると推認されるけれども、割出し技術が高度化してきており、書込み者が特定される可能性が高くなっていることを説明しておきたい。

困難があっても、前向きに生きる指導を

むろん、各学校での指導は、それだけで終わってはならない。書込み者本人（個人）が特定される可能性が高くなっていると説明しても、「自分は大丈夫だろう」と考えれば、書込みをしてしまう。

重要なことは、他人を困らせたり、不安に追いやることに喜びを感じているレベルの生き方の空しさに気づかせ、困難や不満があっても、前向きに生きていくことの素晴らしさを理解し、努力する意欲を強化することである。今回の秋葉原殺人事件の犯人と、平成7年に発生した大阪教育大学附属池田小学校事件の犯人（死刑執行）の意識には、自身の主観的「不運」や「不遇」を社会や他人への恨みに転ずるという点で共通性が見られる。しかし、このような意識とそれに基づく犯罪行為が正当化されることはあり得ないことを強調し、生徒たちに前向きに生きる自覚を促すようにしたい。

（わかい・やいち = 上越教育大学大学院教授・附属図書館長）

●最新刊！ ●4月から実施の「指導改善研修」、免許更新制の導入等へ万全の対応を！ 教育開発研究所

『教員の養成・免許・採用・研修』若井彌一編著 A5判 370頁 定価 3570円

■緊急出版！ 5月16日発売！

工藤文三【編】B5判 220頁・定価 2,520円

『小学校・中学校 新学習指導要領 全文とポイント解説』